

日時 2022年10月14日(金) 17:00～18:00

会場 第5会場 東京国際フォーラム
Bブロック5F ホールB5(2)

オンデマンド配信 2022年11月1日(火)～
11月30日(水)

光をつなぐ！シリーズXIII

難治性DMEに 立ち向かう！ 病態と治療



座長

西口 康二 先生

名古屋大学大学院 医学系研究科
眼科学教室 教授

近年、糖尿病黄斑浮腫(以下、DME)の治療成績は目覚ましい向上を見せています。薬物治療では新しい薬剤も登場し、また観察系の進化によって、個々のDMEへの適切な治療選択も可能になってきています。しかしながら、難治性のDMEにはいまだに悩まされることも多いと思います。そこで、本セミナーではこの難問について病態と治療の2つの視点からご講演をお願いしました。

中尾新太郎先生(九州医療センター)には、難治性DMEの病態について基礎的な面も含めてご解説いただきます。敵の正体が分かれば適した治療法を選択することができ、所見で背後の病態をイメージできれば確信をもって治療選択をすることができます。病態をイメージする際の大きなヒントを見つけられる貴重な機会になると思います。

馬場隆之先生(千葉大学)には、DMEの治療法の中でも、特に硝子体手術治療にフォーカスを当ててお話いただきます。DME治療でまず行われるのは薬物療法とレーザー治療であり、硝子体手術を検討する症例は必然的に難治性DMEであることが多いと思います。現在の、DME治療における硝子体手術の立ち位置を再確認できる絶好のチャンスだと思います。

セミナー当日は多くの先生方にご参加いただけることを楽しみにしております。



演者① 中尾 新太郎 先生 国立病院機構九州医療センター 眼科 医長

難治性糖尿病黄斑浮腫の病態



演者② 馬場 隆之 先生 千葉大学大学院医学研究院 眼科学 教授

糖尿病黄斑浮腫に対する硝子体手術の意義

光をつなぐ!～シーズンⅢ～

難治性DMEに立ち向かう!～病態と治療～

日時 2022年10月14日(金) 17:00～18:00

会場 第5会場 東京国際フォーラム Bブロック5F ホールB5(2)

オンデマンド配信 2022年11月1日(火)～11月30日(水)



座長 にしぐち こうじ 西口 康二 先生 名古屋大学大学院 医学系研究科 眼科学教室 教授

【略歴】

1999年 名古屋大学眼科 医員
2000年 米国・ハーバード大学 フェロー
2002年 米国・ハーバード大学 フェロー
2007年 名古屋大学眼科 助教
2011年 スイス・ローザンヌ大学 フェロー

2012年 英国・UCL 臨床研究員
2014年 東北大学視覚先端医療学 准教授
2020年 名古屋大学眼科 教授

講演 ①

難治性糖尿病黄斑浮腫の病態



演者 なか お しんたろう 中尾 新太郎 先生 国立病院機構九州医療センター 眼科 医長

【略歴】

1998年 鹿児島大学医学部 卒業
九州大学医学部眼科学教室 入局
2000年 九州大学医学部大学院医学研究科(医化学分野)
2006年 米国 Massachusetts Eye & Ear Infirmary 留学

2013年 九州大学病院 助教
2017年 九州大学病院 講師
2020年 国立病院機構九州医療センター 眼科医長

糖尿病網膜症は日常診療で頻繁に遭遇する疾患です。その一病態である糖尿病黄斑浮腫は網膜症病期を問わず視力を脅かすため、適切な診断と早期治療が求められます。近年、抗VEGF療法が第1選択となり幅広く使用されていますが、日常診療では治療抵抗例も散見されます。米国のデータでは抗VEGF療法を適切に使用しても、糖尿病黄斑浮腫の約4割の症例が治療に抵抗するとの報告もあります¹⁾。そのため、一定数存在する難治例に対しては病態を理解し、適切な治療を行うことが求められます。われわれは抗VEGF療法治療抵抗症例の硝子体手術サンプルと基礎実験から炎症病態の関与が示唆されることを見出しました。また、OCTの普及とともに硝子体界面の変化や中心窩嚢胞など浮腫形態と難治性病態の関連についても報告されています。皆様の明日からの糖尿病黄斑浮腫診療にこのセミナーが役立つことができれば幸いです。

1) JAMA Ophthalmol. 134(3):278-285, 2016

講演 ②

糖尿病黄斑浮腫に対する硝子体手術の意義



演者 ば ば たかゆき 馬場 隆之 先生 千葉大学大学院医学研究院 眼科学 教授

【略歴】

1997年 東京医科歯科大学医学部 卒業 眼科研修医
1999年 都立広尾病院眼科
2003年 東京医科歯科大学眼科 助教
2007年 米国ジョンホプキンス大学 研究員

2010年 千葉大学大学院医学研究院眼科学 助教
2012年 千葉大学大学院医学研究院眼科学 講師
2017年 千葉大学大学院医学研究院眼科学 准教授
2022年 千葉大学大学院医学研究院眼科学 教授

糖尿病黄斑浮腫は糖代謝異常に伴う網膜血管内皮細胞および周皮細胞の障害により、網膜血管のバリアが破綻し、血管透過性が亢進し、漏出することにより発症します。糖尿病黄斑浮腫に対する治療は、現在では抗血管内皮細胞増殖因子(VEGF)薬の硝子体内注射が中心的な治療であり、これに網膜光凝固を組み合わせる行うことが一般的です。糖尿病黄斑浮腫に対する硝子体手術は1990年代にはじめて報告され、現在でも薬物治療やレーザー治療に反応しない難治例に対して行われることがあります。硝子体手術は、黄斑にかかる牽引を除去し、血管透過性を促進させる局所のサイトカイン濃度を減少させ、また硝子体を切除することにより、網膜内の酸素分圧を上昇させる効果があると考えられており、これらの作用が総合して働くことにより黄斑浮腫を軽減します。本講演では、硝子体手術の奏効機序、手術適応と期待される効果、治療上注意すべき点などについてお話しさせていただきます。